

本山コレクションの青森県出土資料 : 佐藤郁・蓑虫山人・神田孝平と久原房之助

著者	山口 卓也
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	66
ページ	12-13
発行年	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023873

本山コレクションの青森県出土資料

—佐藤 蒔・蓑虫山人・神田孝平と久原房之助—

山口 卓也

I 関西大学博物館の本山コレクションには、東北地方の資料が多数含まれている。その多くは、東京人類学会初代会長で政官界の重鎮でもあった神田孝平（1830-1898）が、人脈を駆使して、各地の考古学研究者から蒐集したものである。

神田の青森県考古資料の収集は、青森在住の研究者、佐藤 蒔（1852-1944）と放浪の画家、蓑虫山人（1836-1900）が深く関係した（関根・上條2009）。佐藤は、営林署（青森大林区）に勤務するかたわら、植物画で名を成した。佐藤は、青森県亀ヶ岡遺跡の遺物に刺激されて、県内の考古遺物の研究を始め、明治12年頃から考古資料を蒐集する。明治19年に東京人類学会に入会し、神田や中央の学会と交流をもった。

蓑虫山人とともに、青森各地の研究者や蒐集家を訪ね、考古資料の画（考古図譜）を454枚残した。64枚に作画年が記されており、明治13年からほぼ10年間に多く描かれている。この時期、佐藤は東京人類学会で図による報告を頻繁に行っており、中央の研究者も佐藤の図を多く利用している。中央の考古学研究動向に連なった知的刺激と、青森県の考古学情報を中央に伝達することに対する使命感が、その精進につながったのではなかろうか。

青森県の考古資料を最初に神田に仲介したのは、画家、蓑虫山人であったとされる。考古資料を描いた蓑虫山人の画風は純化デフォルメであったが、佐藤は同じ資料を詳細に観察して「実測図」とした。



図1 蓑虫山人が描いた考古資料図（弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター）

佐藤の図のいくつかには付記があり、旧所蔵者の名前や出土地、発見の経緯を知ることができる（関根2009 他）。対照作業の結果、本山コレクションで出土地不詳とされていたもののいくつかは、青森県の出土地と由来を確認できた。

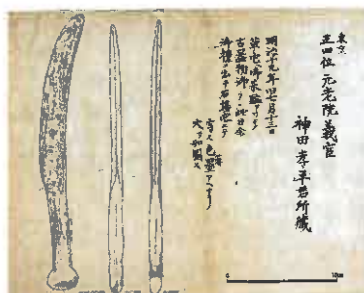


図2 佐藤 蒔の描いた神田孝平旧蔵石刀



図3 本山資料 MY-S0233



図4 佐藤 蒔が描いた須恵器



図5 本山資料 MY-K2242

図2の石刀は、明治19年7月13日に神田孝平の青森訪問を機会として描かれたもので、このときすでに神田孝平所蔵と添書きされている。その形状から、本山コレクションの石刀 MY-S0233（図3）と特定できる。

図4は、明治14年に描かれた須恵器大甕である。西津軽郡猫縁村山本惣左衛門の所蔵とあり、出土地は現在の鶴田町稲元遺跡と判明している。底部のすばまる特徴のある器形と口縁部の欠損が正確に描かれていたことから、MY-K2242（図5）と特定できた。

本山コレクションでは、その他に石棒や独鈷石、環状石斧、土面、晩期注口土器、壺形土器、

鉢形土器などが描かれている。これらも、菘虫山人が仲介して、青森県の蒐集家から神田孝平へ譲渡されたものと考えられる。

本山彦一は、神田の死後、昭和5（1930）年に古物商から神田孝平旧蔵の資料を購入する。神田とは、慶應義塾や福沢諭吉との接点で面識があったことも理由の一つとなったにちがいない。その結果、神田の旧蔵品約1300点で自身の蒐集品を拡充し、日本全国、朝鮮半島や台湾、南洋諸島まで幅広いコレクションに網羅することになった。昭和7年には、濱田耕作京都帝国大学教授の教示と援助を受けながら、大阪府堺市濱寺の富民協会農業博物館に、本山考古室を開室する。



図6 本山彦一蔵
故神田孝平先生
旧蔵資料の目録

本山彦一は、八戸市
是川遺跡に石碑を建立

するなど、死去するまで青森県の遺跡に関心を持ち続けた。佐藤部とも交流があったという。

Ⅱ 佐藤部は、膨大な遺物を蒐集したが、大正8（1919）年、大病を患ったのを契機に、その所蔵品すべてを大阪の政財界人、久原房之助（1869-1965）に譲渡した。「雪櫃で5台分」という膨大な資料で、対価は当時の九千数百円であったという。この譲渡の紹介者が誰だったか、ぜひ知りたいと思う。

久原房之助は、藤田伝三郎男爵の甥で、一時藤田組支配人を勤め、後に日立製作所の基となった久原鋳業所を起こしたことで知られる。昭和に入って、立憲政友会から衆院議員、閣僚となり、さらに2.26事件や大政翼賛会に関与、「政界の黒幕」「怪物」などと呼ばれた。

久原は、数寄者として美術骨董趣味で知られている（斎藤2012）が、考古分野の蒐集を続けようとした形跡は認められない。逆に、政界に転じた昭和3年、これを鋳業所経営で関係のあった東北帝国大学にあっさり委託している。

本山彦一（1853-1932）は、継続して考古資料の蒐集を続けた点で、久原と違っている。同じ慶應義塾出身で藤田組に勤め、さらに久原の姉が本山の妻であったことから、面識があったことは間違いない。現在の藤田美術館のコレクションを形成した藤田男爵も両者の縁戚であったので、三者に

濃密な交流があったことが想像できる。

久原が佐藤のコレクションを譲り受けた大正8年は、本山が最も精力的に資料蒐集、発掘調査の支援と派遣を行っていた時期にあたる。本山は、大正元（1912）年の宮崎県西都原古墳群の発掘を支援見学した後、「考古趣味」が高じ、大正6年から7年には、本山自身が「三大発掘」に数える大阪府国府遺跡を発掘し、多くの出土品を入手した。大正9年には、東北地方に足を延ばして三陸海岸貝塚の発掘を行っている。

本来、本山自身が、このような東北の考古学蒐集資料を渴欲していた可能性があるのに、特に欲求が強いと思えぬ久原が、佐藤の資料を入手し、さらになく手放すことになった背景には、本山への数寄者としての対抗心、または逆に本山から積極的な示唆があったのではないかと思われる。

一方、大病を脱した佐藤は、再び考古資料の蒐集を始め、昭和初期には再び1000点近くのコレクションを形成したという。

Ⅲ 大正期、各地の知識人、財界人は本業の傍ら、社会奉仕や近代数寄者として、茶の湯や美術品、骨董の蒐集、建築道楽など趣味世界で、さまざまな活動をおこなった。コレクションは特定の分野への「こだわり」が生み出す生成物である。これら非経済的な活動は、実は人的な関わりの中で相互に触発されたものだったかと思われる。

関西大学博物館の本山コレクションには様々な背景のものがあり、由来を解きほぐすことによって、日本考古学の歴史を垣間見ることができ。今後も、検討を続けていきたい。

佐藤部について、弘前大学の上條信彦氏から教示を受けた。御礼申しあげる。

引用・参考文献

- 上條信彦 2011「佐藤部 考古画譜Ⅲ」弘前大学人文学部附属
亀ヶ岡文化研究センター
斎藤康彦 2012「近代数寄者のネットワーク」思文閣
関根達人・上條信彦 2009「成田コレクション考古資料図録」
弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
関根達人 2009「佐藤部 考古画譜Ⅰ」弘前大学人文学部附属
亀ヶ岡文化研究センター
関根達人 2010「佐藤部 考古画譜Ⅱ」弘前大学人文学部附属
亀ヶ岡文化研究センター
東北大学文学部 1982「東北大学文学部 考古学資料図録」

関西大学博物館学芸員